2024年6月9日（日）「我は主のもの」

ヨブ 1:13-22

13 ヨブの息子、娘が長兄の家で食事をし、ぶどう酒を飲んでいた日のことである。 14 ヨブのもとに使者がやって来て言った。「牛が畑を耕し、その傍らで雌ろばが草を食んでおりますと、 15 シェバ人が襲いかかって、これを奪い、若者たちを剣で打ち殺しました。私一人が、あなたにお知らせするために逃れて来たのです。」

16 彼がまだ話している間に、別の者がやって来て言った。「神の火が天から降り、羊と若者たちを焼き尽くしました。私一人が、あなたにお知らせするために逃れて来たのです。」

17 彼がまだ話している間に、別の者がやって来て言った。「カルデア人が三隊に分かれて、らくだを襲い、これを奪い、若者たちを剣で打ち殺しました。私一人が、あなたにお知らせするために逃れて来たのです。」

18 彼がまだ話している間に、別の者がやって来て言った。「あなたのご子息、ご息女がたはご長男の家で食事をされ、ぶどう酒を召し上がっておられました。 19 その時、大風が荒れ野の方から吹いて来て、家の四隅を打ち、それが若者たちの上に倒れ、皆様は亡くなられました。私一人が、あなたにお知らせするために逃れて来たのです。」

20 ヨブは立ち上がり、上着を引き裂いて、頭をそり、地に身を投げ、ひれ伏して 21 言った。「私は裸で母の胎を出た。また裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の名はほめたたえられますように。」 22 このような時でも、ヨブは罪を犯さず、神を非難しなかった。

【序論】

幸せの絶頂からどん底に突き落とされるような経験は、誰の人生にも起こりうることです。私たちはヨブの人生の中にそれを見ていくことになりますが、私たちの現実生活の中にも、震災や火災、戦争や火山の噴火、詐欺や冤罪、失業や病気など、天災または人災によって思いがけない打撃を受けることがあります。今日の箇所で、ヨブは天災と人災の両方を一挙に味わうことになるのですが、矢継ぎ早にやってきた災いに打ちのめされる彼の姿が痛々しいです。今日のポイントは、それに対して彼がどのように反応するかであります。著者が注目しているのは、あくまでも「神とヨブの関係」です。読者は「自分だったらどうか」ということを考えながらテキストに取り組む必要があるでしょう。

【本論】

今日はヨブに降った「第一の災い」を見ていきますが、ここには四つの災いが立て続けに出てきます。順序としては、「人災 → 天災 → 人災 → 天災」となっており、災いの程度がだんだんと激しくなるのが特徴です。

本論Ａ．四つの災い

①シェバ人の襲来

ヨブの息子、娘が長兄の家で食事をし、ぶどう酒を飲んでいた日のことである。ヨブのもとに使者がやって来て言った。「牛が畑を耕し、その傍らで雌ろばが草を食んでおりますと、シェバ人が襲いかかって、これを奪い、若者たちを剣で打ち殺しました。私一人が、あなたにお知らせするために逃れて来たのです。」（1:13-15）

以前にも申しましたように、ヨブの家庭では日替わりで子どもたちが食事のもてなしを担当して兄弟たちを家に招く習慣があったようです。

息子たちはそれぞれ自分の日に、その家で祝宴を催し、使いを送って三人の姉妹たちをも呼び寄せ、食事を共にするのが常であった。（1:4）

この祝宴が長男の担当だった日、最初の災いが起こりました。祝宴が催されている間、おそらく雇われ人の若者たちが畑の作業をしていたのだと思われますが、シェバ人が襲ってきたのです。「シェバ人」には二つの説があります。

(1) アラビア半島南西部に住んでいた貿易商人

(2) アラビア半島北部に拠点を置く遊牧民

多民族を急襲し略奪する傾向から見ると後者の方がそれに当たる気がしますが、彼らが後に貿易商人になったとも考えられます。

第一の災いは人災であり、ヨブの間接的な資産がやられたということになります。奪われたのは、500 軛の牛、500 頭の雌ろば、そして労働者です。この時点ではまだヨブの直接的な子孫には害が及んでいません。

②落雷

彼がまだ話している間に、別の者がやって来て言った。「神の火が天から降り、羊と若者たちを焼き尽くしました。私一人が、あなたにお知らせするために逃れて来たのです。」（1:16）

広大な土地を持っていたヨブの別の所有地で、「**神の火**」が天から降ったと言われています。これはおそらく落雷のことで、その地域一帯を焼き尽くしたということですから、単なる自然現象とは思えません。まるで狙い撃ちにするかのように雷が連発したのでしょう。ここで失われたものは、7000 頭の羊と羊飼いたちです。

第二の災いは天災でしたが、ここでもまだヨブの直接的な子孫には害が及んでいません。

③カルデア人の襲来

彼がまだ話している間に、別の者がやって来て言った。「カルデア人が三隊に分かれて、らくだを襲い、これを奪い、若者たちを剣で打ち殺しました。私一人が、あなたにお知らせするために逃れて来たのです。」（1:17）

第三の災いは、カルデア人による襲撃です。「**カルデア人**」とは、南バビロニアに住んでいた民族であり、漁業、狩猟、家畜の飼育などに携わっていましたが、都市部に住む人々に敵対

していたようです。彼らは後に新バビロニア帝国の中核となっていきます。彼らが戦略的に略奪を行なっていたことが分かるのは、「**三隊に分かれて**」らくだを奪いに来たということです。一方向からではらくだが反対側に逃げて行ってしまうので、三方から挟み撃ちにしたのです。ヨブは3000頭のらくだを所有していましたが、それらすべてが持っていかれたということでしょう。そして、らくだの世話をしていた人々も殺されました。

第三の災いは人災でしたが、ここでもまだヨブの直接的な子孫には害が及んでいません。

④竜巻

> **彼がまだ話している間に、別の者がやって来て言った。「あなたのご子息、ご息女がたはご長男の家で食事をされ、ぶどう酒を召し上がっておられました。その時、大風が荒れ野の方から吹いて来て、家の四隅を打ち、それが若者たちの上に倒れ、皆様は亡くなられました。私一人が、あなたにお知らせするために逃れて来たのです。」**（1:18-19）

第四の災いは「**大風**」ですが、それが家を滅茶苦茶に破壊してしまうほどですから、おそらく竜巻でしょう。今回はついにヨブの直接的な子孫に害が及んでしまいました。兄弟姉妹が集まっての食事会という最高に幸せなときに、彼らが一堂に会していたがために、全員が命を失うことになってしまったのです。ヨブは子を失っただけでなく、彼の子孫も絶えたということです。

第四の災いは天災であり、これをもってヨブは無一文となっただけでなく、妻以外の家族をも失いました。ここまでヨブはただ報告者の報告を聞いているだけですが、ついに次の行動に移ります。

<u>本論Ｂ．ヨブの反応</u>

> **ヨブは立ち上がり、上着を引き裂いて、頭をそり、地に身を投げ、ひれ伏して言った。「私は裸で母の胎を出た。また裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の名はほめたたえられますように。」このような時でも、ヨブは罪を犯さず、神を非難しなかった。**（1:20-22）

「**上着を引き裂いて、頭をそり**」とは、深い悲しみを表す行為。「**地に身を投げ、ひれ伏して**」とは、神の御旨に従う決意の表明です。これほどの災難に見舞われても尚、彼は礼拝することをやめなかったのです。そして、彼の信仰のことばが続きます。彼は生まれたときに何も持っていなかったということを振り返り、自分の人生に与えられた諸々の財産と家族はすべて神から来たものだという認識を示しています。「**裸でそこに帰ろう**」とは、死んで大地に葬られることでしょう。人は死ぬときには何も持っていくことができません。どんなに多くのものを得ても、永遠の世界に持ち越すことはできないのです。彼は自分が一時的な居留者であることを認め、自分の人生がどのようになったとしても、それは神の意思によるものであると信仰を告白しています。このような状態になってこういうことばが出てくるということは、彼がどんなに財産を蓄えていたとしてもそういう認識で生きていたということを意味します。多くの人は金持ちになると自分の力でそれを成し遂げたかのように自らを誇

りやすいものですが、ヨブはあくまでもへりくだった心で生きていたのです。「**このような時でも、ヨブは罪を犯さず、神を非難しなかった**」というフレーズに、彼の生き方のすべてが現れています。ヨブは地上のものを喜んで享受していましたが、それらに執着してはいなかったのです。

ここで読者に問われてくることは、私たちは地上のものにどれほどこだわって生きているかということでしょう。それが取り去られたとき、私たちはどう反応し、何を語るでしょうか。ある大金持ちは、世界大恐慌で株価が大暴落したときに自ら命を絶ちました。お金や財産はいつしか自分の命よりも大事になっているかもしれません。それらを手放す自由が人間にはあるということをヨブは読者に教えてくれているように思います。

【結論】

聖歌 493 番「わが友主イェスは」の 1 節の最後の行では「今主はわがもの、我は主のもの」と歌われます。私たちがすべてを失ったとしても、私たちは主のものであるということが最後に残るのです。ハイデルベルク信仰問答からも引用してみましょう。

問1　生きている時も、死ぬ時も、あなたの唯一の慰めは何ですか。
答え　生きている時も、死ぬ時も、身も魂も、私自身のものではなく、私の信頼する救い主イエス・キリストのものであるということであります。

ヨブの信仰告白に表された「主にある自由」を、私たちも告白したいと思います。

【祈り】

すべてのものを与え給う、天の父なる神様。私たちは地上にあって多くのものを手にします。しかし、それらはすべて主よりの賜物であり、私たちは居留者に過ぎません。願わくば、この世のものに執着せず、天に属するものを大切にして生きることができますように。そして、自分自身が神のものであると告白しつつ、この人生を全うできるよう導いてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
ヨブの人生を祝福し、多くのもので満たし給うた、父なる神の愛、
すべてを喪失したヨブをも贖い、十字架で命を投げ出し給うた、主イエス・キリストの恵み、
地上のものへの執着より解放し、天に属するものに心を向けさせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。